ミオヤの光

不斷の卷

人生の歸趣
大乘佛敎道德歸趣
菩提心
志道の菩薩
道德動機の階級
如來の神聖正義と人の至誠心
不斷光
自奮
惡俗に抵抗する力
精力集中
精力を徒らに消耗する勿れ
力の十界に分るゝ所以
良心に反する人望
不屈の精神
精力集中の利益
精力集中法
祈

人生の歸趣

佛敎に依て自覺せざる人は、闇黑の生活にして人生は唯肉體の生活を以て終局と思ひ精神的に永遠の光明を信認することなく、我何より生れ來り如何にして人生の歸趣すべきかを自覺せず、是等を無明生死の凡夫と云ふ。「世の人自らの智慧を以て生の從來する處死の趣向する處を知らず、不仁不順にも天地に違逆して其中に於て希望僥倖して長生を求むれども、かならず當に死に歸すべし。乃至天地の間に五道分明にして恢廓窈窕浩々茫々たり。善惡報應して禍福相承く。身自ら之を受く誰の代る者なし。數の自然にして其行ふ如くに應じて殃咎をうく。命を追ふて縱捨するを得ること無し。善人は善を行して樂より樂に入り明より明に入り、惡人は惡を行して苦より苦に入り冥より冥に入る。誰か能く知る者あらん。獨佛のみ知り玉ふ。敎語開示すれども信用する者は少く、生死休まず惡道絶えず」。と明し玉ふ如く衆生は自ら生死の眞源を覺らず、然れども善惡の業は必ず苦樂の報を感ず。

人は何故に本佛性有し乍ら自ら覺らずして生死の中に流轉する哉とすれば、人靈性具有すると同時に、人間に受けたる形氣の煩惱に覆はれ、佛性は未だ萠芽せず、唯此肉體を保護する處の動物欲が先に發達す。啻に本能的に動物欲發達したるのみに非ず、智慧迄も唯肉體の欲望を滿足せんが爲にのみ發達して、高等なる理想の靈性に萠發せず。凡て精神發達の順序に於ても初め劣等なる植物性が發達し次に動物性次に精神性と發達す。同じ精神に於ても高等なる性情は容易に發揮し難し。榮養と生殖の作用の如きは植物も同じく有する性にて五官の働きに至つては植物には無く、唯動物共通の性である。眼の色を視耳の聲を聽き鼻の香を嗅ぎ舌の味を感覺する如き動物も人類も共通の作用である。却て高等動物には眼の開夜に物を視はた嗅覺の敏慧なる如きに至つては人類よりも發達して居るなり。却て人類は精神の中の高等なる理性また進んで靈性が働く處よりして最靈の精神生活に入るのである。道德上に於ても人類は能く善惡邪正また權利義務と云ふことを能く諦かに判斷し推察し得らるる理性なる智力を以て我と彼とを照し合せ、夫で道德上の自らの高等なる理性の智が自らの肉慾や我慾の劣等なる慾を判裁することが出來る。道德上の自己を剋己し抑制する等の高等なる德性は能く精練せざれば發揮せぬ。

人類は高等なる動物にて奥底に伏せる靈性未だ開發せざる間は其情操が卑俗たるを免れぬ。いかに寶石たるも琢磨の功を藉らざれば光輝發せず。人の精神の主我意志（本能的の我見、我愛、我慢）が我を本位とし其主義が世俗的情操より衝動また活動して其慾望する處のものは世界動機とて世の中の名譽または權利財產位置等の爲に動かされて其心底の浮薄卑俗なること實に淺薄である。故に世の中に吹き荒む八風なる利害とか毀譽褒貶苦樂等の爲に動搖し易く、故に其人生の終局目的なる大事をも敢て自覺せんと要求せず、故に其人格を形成する要素に就ても善緣に遇はば善に向ひ惡緣に誘はるれば惡人となる。此の如きを輕毛の凡夫六道何れとも定趣なき衆生なり。今佛敎

は自己の安心決定なき終局目的判然ならざる譬を大に排斥す。是れ恰も國家より戸籍なき無所屬の徒に對する如し。故に宗教にては宗教的人格の一大根本は正しく彌陀の實在者に歸命信賴して永恒に神の國に依止すべきの信仰を鞏固にするなり。

菩提心の四位　一　願生心。

無上の大道を進んで最終の人格と常住の平和に行くべき道を菩提と云ふ。一切諸佛は斯大道に乘じて已に正覺を成し玉へるなり。之を今宗教的に云はば光明の大道である。此道に入て正しく成就するまでに四願心あり。一願生心　是從來の主我主義の我、善惡不定意志なりし我が心靈に生れ更りまた靈に新らしく心が生れたと云ふを願生心と云ふ。靈に生れたいと云ふに三の條件がある。

一、所歸の本尊。　二、所求の處。　三、本尊心と合一する方法。

一、所歸の尊格。我等宗教に依りて從來の我は迷にして絶對の眞我ならざるを認めたり。いかにするも我等はまた現に吾人が賴みに思ふ此世界も我等も永遠に安穩なる事はできぬ。如何んぞ畢竟して所屬すべき處ならん。されば佛陀は敎へ玉へり。現世界は唯安樂に耽る舞臺に非ず絶對なる常住の靈界に入るべき修行の道場たり。我等衆生に常住の安寧を與へ玉ふ、絶對的の實在者無量光尊に歸命せよ。一切衆生は本法身より稟けたる靈性を有す。是金剛石の未だ琢磨せざる如し。此世界に稟けたる形氣の煩惱の垢質の爲に未だ覆はれてゐる。若し專ら無量光尊に歸命信樂し、聖意に合契すべき念佛三昧に若くに瞑想若は口稱一心不亂なれば、若くは頓速に若くは漸次に、心意が純熟するに隨て、例へば姙婦の月滿ちて分娩する如くに、靈き心は生れ出でん。聖き心が生れて見れば從來見來りし娑婆にはあれど、今まで闇の夜中に暮せしのが今は曉つて光明曙光を見るに至り、ここに始めて絶待なる常住平和の無量壽國の人と爲ることが出來て、安心の場所だけは得られた。實に此心の生ることが一大事であつて而かも難關である。然れども本々佛の子なれば慈悲の懷に抱かれて温まる時は必ず出產難きに非ず。

二、願作佛心。已に佛の子は生れた。生れた儘では未だ全體發育せぬ。慈愛の懷かしき母の顏さへ見えぬ。されども嗚！聲の口に慈悲の乳房は哺まれて次第に肥立ちて眼も見え耳も聽えすべての靈性の作用は漸次發育する。兒は母の慈悲の懷に育まれるに就て斯樣な話がある。有ゆる動物中にて人の兒が最母の懷に手を放るるまでの年月が長い。是には何等かの要あるであらう。或人の考には、人の兒が母の懷に抱かるることの長いのは唯形體の育てる計りでなく、母の暖温な慈悲を以て人の子としての愛てふ高等な感情を養ふ爲めであると。して見れば我等如來の子が慈愛の懷に抱かれて慈父のそれの如くに愛化していと麗しき感情を成生する爲めとすれば、慈父の如來は我等を佛に化す。我等は父の全き如くに向上するを宗とす。如來が道德心を養ひたまふ慈悲の父母として三の聖德を以て我等に嚴臨し玉ふ。三德とは神聖と正義と恩寵と此なり。

如來は獨尊なれども神聖と正義としての父にして恩寵は母に比す。斯三德が我等が靈德を養ふ要素一切道德の本源なり。通佛敎に謂ゆる法身と般若と解脫との三德に比すべし。一神聖は如來が一切衆生の嚴肅なる家庭の父として我人の行爲を照鑑し玉ふ智慧である。神聖とは行爲を照す智慧なり。如來は天命の性の根〻、一切道德律の原則でまします。神聖は明淨なる鏡の如くに如實に衆生の身口意の三業を照し玉ふて毫も私なし。如來の神聖なる眞理の光は太陽の如くに外界より照すに非ず、絶對なる大威力者より直覺的に衆生の良心に囁き來る命令の力なり。宇宙には是の如きの道德秩序の理性の存在することは天の軌道に日月星辰が運行する理の在る如しと。例へば天が生物を活すに保護性を賦する如く又人の生を愛し死を憎む自然性の如くに、宇宙には道德法が存在する故に實に道德法の原法は人爲的法ではない。故に神聖にして犯す可からざる法則である。凡べて物には自然法樹の理がある。火の熱き水の潤ふ如く、善惡の根本的原理は法爾として定まつて居る。故に佛敎大乘戒の根本とも云ふべき梵網經に道德律の淵源、法性本然の法則にして、一切諸佛造作に非ず。釋尊菩提樹下にて

正覺を成すると直ちに道德律の根本として菩薩の波羅提木叉を結し玉ふた。斯道德律の根本は釋尊自ら造りしにあらず、法性本然の眞理なることを現す爲に梵網三昧に入り玉ふた。すると釋尊の本地本佛の境界に成玉ふた。曰く、我今盧遮那方に蓮華臺に坐す。周匝せる千華の上にまた千の釋迦を現す。一華に百億國あり、一國に一釋迦あり各菩提樹下に坐して一時に佛道を成す。是の如き千と百億とは盧舍那を本身とす。千と百億との釋迦、各微塵の衆を攝して俱に我が所に來至して我佛戒を誦するを聽いて甘露の門卽ち開けぬ。是の時に千と百億釋迦還て本道場に至て各我本師の戒十重四十八を誦す。戒は明な日月の如く亦瓔珞珠の如し。一切の菩薩衆是に由て正覺を成す。是盧遮那誦し玉ふ。我も亦是の如く誦す。汝新學の菩薩も頂戴して戒を受持せよ。是の戒を誦し已つて轉じて諸の衆生に授くべし。諦に聽け。是正しく佛法中の戒藏波羅提木叉を誦すべし。大衆心に諦かに信ぜよ。汝は是當成の佛、我は是已成の佛なりと。常に是の如きの信を作さば戒品已に具足す。一切心あらん者は皆應に佛戒を受くべし。衆生佛戒を受くれば卽ち諸佛の位に入る。位大覺に同じ已りなば眞に是れ諸佛の子なり」と。

此意は道德律の根本は法性自然の眞理、神聖にしてまたこは普遍的眞理なれば千聖も交べす萬佛も改めず大宇宙の中心本尊たる盧舍那佛が有らゆる分身の釋迦を徵集して自ら誦し玉ふ。此の神聖と正義とは道德律の根本とす。

大乘佛敎道德歸趣

人格三位の中後の靈格のみ相待の世界を超絶して絶對の大根底を立脚地とする卽ち神の國の人格たる最高等なる道德の歸する處なり。靈格の中三等あり。聲聞と緣覺とは方便にて絶對なる父の聖意を意として自とすべてと平等に靈に活き共に父の全き如くに宗成し同じく常住の平和を得んとの願望を以て目的と爲すはひとり菩薩のみ。菩薩は卽ち佛の法王子である。

佛陀は道德的最英靈的人格の光明として自ら最勝無上の大道德の立脚地に安立し自己を標準としてすべての子等をして善惡相待六道の迷衢を出でて二乘偏狹の經を越えて無上の光明の大道に立てよと絶叫したまふ。斯の菩提大道は一切諸佛聖賢の同一の光明大道なり。過去の諸佛も斯大道より無上大覺の帝都に登り未來の諸佛皆然ざるはなし。之諸佛通達の最勝道なり。斯大道の終局中心の帝都を蓮華藏王都、盧舍那法王の嚴臨し玉ふ處、十方如來一路涅槃の大道、舍那大法王の帝都に通達する大道亦普賢の行願道と云ふ。一切衆生は本と法王の子なれども佛性具し乍ら心開く意拙なくして六道の迷衢に徨ふて曠劫に流轉せり。

佛陀出世の因緣は一切衆生をして斯無上の大道に誘引して圓滿なる人格を得しめ一切衆生と共に常住の安寧を得せしめんが爲なり。斯大道のみ最高德と最幸福の終局する處なり。

菩提心

大乘佛敎にては初發心して法王子と爲ることは發菩提心を本とす。卽ち阿耨多羅三藐三菩提心なり。此に上求菩提下化衆生の二心を起す。上求菩提とは向上門にて願くは我一切諸佛の宗全圓滿なる如くに智德共に具はり萬德豐備して缺くこと無き人格に成り度との願求にて下化衆生とは一切衆生は本同一の眞性なれば我と一切衆生を誘ひて共に無上道を成し同じく福利を齎し度しとの慾望である。今宗敎的に云はば願往生心を云ふ。願往生心とは願作佛心と願度生心と平等安寧願求心なり。若し吾人の言にて云はば願くば如來の中に復活し度し、卽ち聖きに生れ度しとの心、心聖きに生るれは願くば佛に作り度き心、佛に成りたいとは一切衆生を度したき爲め、一切衆生を度すことは願くば一切衆生と共に常住の安寧を得度しとの慾望なり。此の意志の決定せしのが卽ち菩提心である。是菩提心が卽ち最高等なる理想の道德心である。此菩提心に

四を擧ぐれば、一、願生心　二、願作佛心　三、願度生心　四、願平等安樂心。

志道の菩薩

通佛敎にて無上道意を發し斯大道に就業せる人士を菩薩と名づく。此菩薩心を發せし人は上求菩提下化衆生てふ二の願望心が起り上求菩提は向上門諸佛の完全圓滿なるに倣ひて智德共に備はり萬德圓滿にして缺くる事なき靈的人格と成ることの願求。下化衆生とは一切衆生は同一の眞性なれば佗と我と共に無上の道を得たく佗にも福利を同じうせんとの慾望なり。萬德圓滿の佛に成ることを願望すと云ふに佛とはいかなる德を以て莊嚴したまふやと云はは佛陀內証の德は法身平等虛空に周徧し常恒遍在の德無量無邊の功德實に不可思議迚も佛の內包の德は無量無邊といふ外はない。外貌より窺ふ處にしても讃佛の頌の如く、

如來の光顏うづたかく　威神の德は極みなく
日月摩尼の光さへ　隱れて墨の如くなり
如來の容顏世に超へて　外に比らぶる物もなし
正覺の音高くして　十方界にひひきける
正義と多聞と精進と　禪定三昧智智慧ふかく
威德比ぶる物もなく　殊に勝れて不思議也
深く諸佛の法海を　照さぬくまもなかりけり
悟りの海の底ひなく　極なきみそら盡します
無明と欲と怒とは　世界に絕てましまさず
人天の中たくひなく　神德量りなかりけり
無量の功德備りて　智慧深明にまし〳〵て
光明の威相をこそかに　大千界を震動す。

道德動機の階級

道德の說に善惡の標準に就ては學者の說が種々に分れておるが道德の動機卽ち不正を去りて正善の行爲を爲す其意志動機にはまた多容である。他律なるあり自律なるあり。獨のヴントが道德の動機に四階級ありとの說に倣ひて今道德動機の階級を擧れば最も卑き動機なるは世の法律とかまた社會とかの制裁から不正を去りて正しきを行ふあり。若し不正行爲あれば刑法の恐ありまた社會の信用を失ふ。然る時は自己の利害上にもまた名譽にも損失ありてふ意志から打算して惡を避けて善に就く如きは最低の動機。次は敎育服從の動機。是は全く自己の良心より自覺の上に惡を止め善を作すに非ざるも敎育せられて斯々の事は善にして行ふべし斯々は惡なれば行ふべからずと云ふ如き自覺なき佗の敎に律せられたる動機の故に第二階なり。第三は自己の良心に本づく動機。是は自已の良心が正なり善なりと信じた處は佗の毀譽褒貶に拘らず損德利害によらず敢行す、自己の良心より出たるは第三階である。第四は高等なる理想。天とかまた神とか世界己上に道德の根底を置き絕對なる神聖なる實在者の命令が自己の理想に映照せる光が道德の動機とす。先きの良心は風俗習慣に規定せられて左まで惡ならざる事を習慣は非常な罪惡と謂ひまた善ならざる事も風習的に良心は意に介せざるあり。故に良心は相待的の善にして絕待にあらず、絕待の實在者より神聖の光明より照さるる理想の道德動機は最高等である。斯の如く其志操人格の中心が高低ある故に道德の動機に階位がある。

神の神聖なる光明より照さるる理想の道德動機は最高等である。斯の如く道德は動機に於てもまた目的に於ても高低あり。例へば普通人道的道德は人としての履行すへき五常を以て安心とし五倫の道を全ふする如きは人道的道德にて。之よりは進んで絕對至善なる絕對靈界に至善の歸着點を安置き天の聖意を我意とし神の道を我道として高等なる如來地に到達せんとの目的に進捗せんか、道德の向ふ處高等なり。

佛陀は自から最高等なる神聖にして道德志操の高等なる玲瓏として自覺覺他覺行圓滿を以て道德的人格を莊嚴して其人格の光は自から名を聽き形を見る者にて悉く惡を廢め善心を起し非を防ぎ善に就くに至らしむる威德を備へて居る。故に世の最英傑なり斯の如き神聖なる道德上の英靈一切天人の歸崇する處たり。故に世英と云ふ。佛陀自から道德上最高等たる處に嚴臨して一切衆生心は自己の道德心の如くに他のすべてに自覺を與へ而して覺行圓滿なる道德上の最高人格に同化せんと欲して是を最勝道とす自から道德の最終目的の歸着する處は俗に云ふ神國至善の處絕的道德圓滿完全なる人格の集まる處神聖正義慈悲の光明輝く處。之を無量光明土と爲す。

世のすべての人類に佛陀は精神的に至善の光明土を實現せんとす。人々全く佛陀の模範に則り彌陀の神聖正義なる慈悲の光明に靈化し人格一轉す。卽ちたとひ身は娑婆に在りながら心は淨土の人となる。

如來の神聖正義と人の至誠心

如來は眞理の源にして一切法則の一大原則なり。如來の本體は眞理卽ち自性天眞なり。此の自體本然の理より發動して天地萬物を成立し一として自然の理法の條理を失はず。

是法爾法然の理は整然として常たり。秋毫の私あることなし。

火は炎々として焰上し、水は滔々として低きに流る。

法爾の自然は人の私に動かすべからざる天則なり。此の自然の一大元則たる如來心と相應する時は自然に如來心に流入す。水の卑きに流るゝ如く火の高きにのぼるが如し。此の大なる自然法爾の一大原理にかなふべき人の精神は卽ち至誠眞實心是なり。

至誠心は人の天より與へられたる人格の首にして實行を支配する理性是なり。人の良心なるものは風俗習慣に規定せらるゝが故に其の風俗習慣の異るに隨ふて良心もま

た差なき能はず。然れども天が人格の本尊として賦與せられたる靈性に於ては、世の習慣の規定上に超然として、人と人との規定に非ずして天と人との調和合一すべきものの之卽ち此の至誠心なり。

眞理は天然自性なれば人の動かすべきものに非ず。

此眞理の源なる如來を信仰の照鑑に神聖と觀ず。至誠は天に感通すとは天自然と體を共通すればなり。

佛心に相應せんと欲せば肉我の妄心を排除せよ。

三業を指導する意志が至心卽ち靈性よりの動機とすべし。

三業の動機に四種あり。

一、世の法律等の制裁を怖れて

二、他の非難交際上より

三、世間の敎育知識上の良心より

四、如來眞理の命令が自己の靈我に命令して。

虛妄の動機。

內に自ら制伏するの理性力なけれども外他人の輕侮と擯斥とを恐れて表面に賢善を示す。

眞實

眞實心に如來を信じ愛し彼の國に生れんことを望むは眞實に信ずるが故に如來の靈應我に感應し感得するを得べし。靈應實に信受するは喩へば米種を播布したるなり。實は核實にして果の中に核實あるが故に之を播して萠發生成して而して後に花開きよく結果を得べし。眞實の信、眞實の愛、眞實の欲生は全き核實なり。

虛假雜毒の害は雜草の如し。

肉我を主とするは神の前に大に非とすべきなれば一度神に歸して神の光に靈化し去て後は腦髓血肉悉く靈光によりて靈化すべきなり。我等常に神の慈悲の光を信念し憶念相續して止まざる時は此血肉に薫染し血肉も悉く佛化す。本より神の慈愛の靈氣は日日吾人が呼吸する處の澎氣これ如來の大靈氣なり。衆生自ら之を識らずして唯の虛空の如くに思へり。まことに是誤れるなり。若し全く神の慈愛に薫染し靈化する時は滿身是愛たるに至らん。こゝに至つて初めて眞の愛に充さるゝものなり。

不斷光

自奮

善良品位ある人格は自己の盡瘁なくしては形威せず。此に達せんには不斷警戒規律克己を要す。幾多の失敗と困難と誘惑に奮戰して精神强固感情端正ならば最後の勝利を得て現在の人格よりは一層高き標準に達せん。

不斷活力

自己の理想に猛進し世俗名譽の爲に動搖せられざる實價を要す。實價のみ永遠の力眞の活力。毀譽褒貶に頓着せず、靜かに誠實と勇氣とを以て進め。自己創造と保持努力こそ其の基礎たり。自發的活力なくば何の功をか爲さん奔端激流は有力の業をなし機械を動かす力あり。沈滯不動の水は何の益ぞ。不撓不屈の意志は高尚なる希望に向て大膽勇敢に人格を發揮し他の模範たり。一言一行生氣滿々活潑潑地能く人を動す。高潔なる精神正義秩序義務の觀念は强し。

不斷練修

不斷の靈光は人格を高潔にし此の不斷光は人を善に神に近づかしむ。斯く神の不斷光に活動せる人は尊敬すべし。目的は正善に、思想は純良、希望は高尚、彼は日日の出來事を經驗として此の經驗に惡を除きて善に進ましむ。本より修練を目的とすれば失敗も成功も他人の稱譽も毀損にも動せず、相貌異なし。彼は眞理を愛す、世に戀すべきもの眞理ほどはあらじ眞理は愛すべき女神たり彼は彼の女神に接近せんがために戀々として忘れず、彼は身體は老いるとも精神は益々壯なり。

火の力觸るるものをして燒き盡すが如く光明の靈力一切人類の惡性煩惱を燒く力猛し。

意志は性格の靈力なり。自己の性格を支持し精力を强度に發達せしむるには大に修練を要す。宗教道德的靈力は修養によつて益々發達す。此に就て如來は無限の力を與へ給ふ。いかなる事情の下にも迅速に決斷して一度決したる事は頑として動かざるの意力を養ふべし。

自ら決斷して他人の助成を待たず、いかなる事にあはんとも自己の精力と勇氣とに依つて住すべき力を養ふべし。

惡俗に抵抗する力

人は其の精神に自重獨尊の威力なきものは高等なる人格を維持する能はず。世には阿諛媚諂にして自ら奴隷を甘んじて得とすること多し。名利の奴隷たるものの免れざる處。阿諛は唯富貴權門に對するのみに限らず、其の部下臣下に向ふても其れらの甘心を買はんが爲に、ことさらに意を用ゐて阿るもの多し。政治家事業家社會の上流に立つて尊敬を受けるものにしても、自己の位置を購はんが爲めに自ら餓鬼道性となり自から名利の奴隷となるもの比々皆然り、死せる魚力なくして浮べる如くに。

精力集中

經に心を一處に制すれば事として辨せざるなしと。精力卽ち意志の力を用るに、志し

たる事業に集中し、此の事にして成らずんば止めずと、斷乎たる意志金剛の如くに、密着の力强ければ、いかなることも難からざるべし。

熱心と勇氣とは此の精力を集中して其の志す所に向つて猛進す。此の意志の力は荒蕪せる地を開拓して良田となす。アーノルド曰く、一物の上に自己の能力を集中し、之を完成せんと欲せば、時々刻々怠らず實行するに、久しきに及ばつゐに習慣が性をなして、事業はいかに煩瑣なるにも困難なるも、所有る障碍にも誘惑尅にも尅ちて、自己の能力を發揮することを得べし。

人の本能の性に十界の性能具備す。中に就いて何の方面に向つて自己の能力を發揮せんとするも、最高等なる道德的能力を完成せんと欲せば、其の目的に主義に執着し一心を唯此の目的に傾注し、好むといなとに拘はらず一ら之を實行し、其の能力を養成すべし。たとひ初めには性好まざるも、之に意向が傾く時は、漸く趣味を感じ、ついには之を好むにいたるべし。能力發揮の結果は其の性欲をも轉ずるものなり。太施太子精進の力龍王を感せしめて如意珠を得たる如し、是全く一切人類の精神を吸集して靈力の一大團體を作りて地上の天國を建設せしは、此太施太子の意志の力に因る。

精力を徒に消耗する勿れ

人の精力は十界何れをも發揮し、天國をも地獄をも、一の精力の使ひ方いかんに起因す。空しく徒らに惡結果を來すべき事業の爲めに精力を徒費するが如きは、實に一生の恨事なり。大發明家の其の目的に向て一に其の精力を集注し熱中したる結果は、其の一心の集る處に一縷の光明を發して、遂には完成して蒸氣力を以て機關を運轉し、電信となりて人力を助くるに至る。精力利用の功大なり。若しワット及びフランクリン等が精力をして空しく彼を思ひ此を煩らび煩悶に煩悶を生み徒らに精力を消耗せしめばいかに。人は天より善惡邪正迷悟自由に自ら運命を開拓すべき使命を齎らし來れり。

人は自己の潛伏せる靈性を開くべし。釋尊は一切の人類を救濟する光明は所有る天下の博學者に求むるも不可得なりとして、獨り深山に入りて發見せんとす、山に入りて始めにアララ　等の仙人を訪うて道を求むるも未だ眞理の終局にあらずして獨り自ら自己の胸臆の寶庫を開くにあらざれば眞理の光明は發見すべきにあらずとして、伽耶の林中樹下石上にして自ら自心の中に於て一切智を發見し玉へり。自ら無上道を悟りて獨り自覺したるのみにあらず一切の人類も同じ。乃ち嘆じて曰く、あゝ奇なる哉一切衆生云何ぞ具に如來の智慧あり、迷惑して見ず、我當に敎ふるに聖道を以て其をして永く妄想を離れ、自己身中に於て如來廣大の智慧を見ること佛と異ること無きことを得せしめんと。

眞に己を助け己を修め己を養ふの力は己にあり。自から自己に無限の力あることを信じて以て開發すべし。

ジョン、バンヤンは二卷の書藉を材料とし自己の經驗と空想とにより空前の寓意小說を作れり。其の小說が全世界に感化を及ぼすことといかばかりぞや。彼は獄中に呻吟せる貧窮無學の桶屋なり。彼は獄中の寸陰をも徒費せず、圖書館の便あるにあらず、また他の助力を得しにあらず、必要に迫りて自己の精力より喚發したる光によりて小說は現はれたり。彼は自己の胸中にいかなる書にも絕えて得べからざる一大寶藏の存在せるを自覺したるなり。

トマス、ポールは畫家不朽の傑作を以て世界に輝けり。其の幼少なる時はボストン博物館の掃除番なり。

人自己に自助の力潛在す。何ぞ自ら揮つて發展せざるビスマーク曰く、一定の目的に全力を注げと

潴水漏る時は水車を動かす力を減ず、吾人の思想は其の目的の事業に向つて精力を注ぐ時は必ず成らん精力は源泉なれば精力を蓄積して濫りに消耗せざるを要す。思想を二三にする時は一をも成じ難し。他くまで無益の煩累をさけ、無用の勞力を除き全

力を一事に傾注するの習慣を養ふべし。多方面の勞力は勞多くして功少なし。精力は一處に制して力あり活氣あり。多數の矢を一束にする時は強固なりとの例は個人の精力にも應用す。天下の青年は一事を完全に爲し遂れば滿足安心てふ一大報酬あることを知らざるべからず。

又曰く未成の仕事は以て仕事と稱するを得ず一種の腫物なり、流產なり、偉人が大成功を致せる所以は唯一時に一事を爲し遂げずんば止まざりしにあり。

力の界十に分るる所以

人の精神を區分して理性意志と動物欲望とす。理性は自由なる自我にて動物生活卽ち肉慾を指導し宜きに指導して目的に從事するにあり。若し理性意志が發揮して自己の動物慾望、感覺欲等を制裁して、其のよろしきを得るものは、三善道にして、動物欲望のみ發展して理性曖昧なるは劣等なる動物と同じ。邪見逆惡、殘忍酷薄、暴力の方面が、强く發達せるは地獄的能力にして、暴飲暴食飽くことを知らず、色に荒み、斯の如きの感覺欲は一定の快樂屢々行ふ時は、其の機能が痲痺して感覺減少す。益高度に進まざれば快樂の目的達せず、益々進昇してついに肉慾の病的と爲る。唯肉欲の力のみ發達するは卽ち餓鬼の力なり。

財慾の餓鬼

金錢等の財物に貪戾暴欲是金錢の奴隷なり。

エマソンが曰く、富める心なき富者は一個の醜き乞丐なりと。

マーデン曰く、「白頭の翁が食を乞へる有樣甚だ傷し。尙一層憫むべきは金を積んで北斗を支ふとも、冥途のみやげとならざるに、眞善美に對する熱望を抑壓して、空しく蓄積して金の番人となり、財を腐らし併せて身を腐らす、死に損ねの爺なり。借問す梅干爺の寶の持ち腐れよりも可憫なるものありや。是らは人間にめらずして餓なり、渴なり、熱病なり乞食なり」と。財產も恥心を失ふときは一種の祟なり。世間財產は

尋常一般の青年には常に失敗と死とを意味す。

又曰く金錢は空しく之を蓄積し或は濫用して流通を妨ぐる時は弊害百出し人情を沒却し道德を紊り精神を腐らす。

欲てふ一種の寄生蟲ありて幸福と快樂とを蠶食す。こは利己心と嫉妬不滿足と恐怖不安貪慾際限なき野心の小惡魔にして財產の增加に隨て益其の勢力を逞うす是餓鬼の力なり。

○

鍋島閑叟曰く「衣食より始て儉約致し軍國天災の備は勿論窮民を救ひ(中略)我ら衣服の義去春一通申候へども未だ意に合ひ申さず漢の孝文は衣を三度洗濯我朝にても松平太郎上杉鷹山は斯の如しまして我〻如きもの幾度洗ひてもよき事なり故に國許にては木綿ばかり着用可致候。飲食の事我ら幼より奢侈に致し候へとも此節は朝飯は汁香物二品限り夜食は味噌鹽にて宜し。右の趣は其方共より申傳候義につき我から申聞候。」

或時領內加瀨と云ふ處には罪人の仕置ありつる日、近待の士に曰く「明日は罪人の仕置爲る由なるが國中の者我子なり重き罪科を行はしむるはいかにも不便の次第なり。明日は精進にすべし。一體罪人の出つるは政事の行き渡らぬ故にて誠に國の恥辱なり。」と

伊太利殉教者サウオローラ法王より大僧正の僧位を贈り彼の攻擊の鋭鋒を緩めんとせり。然るに彼頑として拒絕して錦の衣紅の僧帽我に於て何かせん。威儀を裝ひ高官を望まん心あらば何を苦んで法衣を纏ふ必要あらん。余は義務の爲に一身を犧牲に供するの覺悟なりと。火刑台上の灰と消ぬ。

佛國大物理學者アボウジ二十七年間努力せし書を下女に焚かれたり。

熊澤蕃山は憂事のなほ此上につもれかし限りある身の力ためさん。と

エリザベス、フライ孃は倫敦富豪の女なりしが自己の奢侈生活を改め慈善家の名ありその手書の坐右の銘に曰く、

一、時は金よりも大切に寸陰も無益に浪費すべからす。
二、堅く信實を守り毫厘も虛僞の言行あるべからず。
三、人の悪評をするな。人の長所を見て短所を見るな。
四、人に怒るなかれ。不親切なるなかれ。
五、節儉を守りて決して奢侈贅澤するなかれ。
六、何事をするにも用意周到なるべし。而して正を行ふのに困難を感ずれば飽くまで神に信賴し神の助力によりて遂行すべし。と。

屈指の天文學者ミチル女史成功の後も婦人通有の虛榮心なく粗衣粗食を以て學生に勤儉を敎へたり。余が所有の衣服全部の價格十七圓に過ぎずと。

米國有名の敎育ライヨレ女史非常な質素克己にて身を持し人の爲に盡したり。善美なる衣服纏ふたることなし質素の衣服を自から織縫し極めて無私無慾義俠心强かりき。

○

正實質素たる勇氣。誘惑に抵抗する勇氣。眞實を語る勇氣。自己の境遇を隱蔽せず眞面目に收入以內の生活を爲すべし。不幸と云ひ錯誤過失多くは意思の薄弱若しくは不斷にする勇氣の缺乏より來る。人正義を知り其の本分を知る然れとも之を實行する勇氣少きのみ。

意思は性格の主力なり。

自己の性格を支持し精力を絕大ならしむるは意思が主なり故に大に訓練し、事物に接して容易に決斷して動かさる習慣を作るべし。

自己の決斷に他人の助言を乞ふ者に至つては全然決斷なきに劣る。吾人はいかなる事件にも自己の精力と勇氣とに依賴すへき習慣を作るべし。

雄大なる目的はあるも唯計畫にとゝまり、事業は企てたるも實行せられず、方針は定まりたるも着手せられず。之等は皆勇氣を缺く故なり。

チラットソン曰く「大事あり二其事明白其要急なるに拘はらす躊躇して直に實行する

能はざる者は必ず意志薄弱の徒なりと。

悪風に抗する勇氣。

阿諛は富貴に向つてのみにあらず下へ向つても用う下の甘心を買はん爲なり。政治家經世家社會の上流に立ちて尊敬を受る者高潔なる品位確實なる修養經たるもの稀なり。

逆流に掉さんとする者は精力と勇氣とを要す。死魚は力なくして浮ぶ。人社會の風潮と抵抗せんとするの意氣なきは死魚のみ。

良心に反する人望

彼より成るを待たずして我より奮ふ故に强硬なる脊骨ある者は偏動する能はず。

多數の喝采を得べき柔な骨は屈曲自在。

バキントン曰く、俗に所謂人望なるものは價値なし。唯其全力を盡して良心の滿足を求めよ。然る時は最も高尙なる意味に於る人望を博し得可しと。

エヂソオルスは最も人望博き人なり晩年其女に語る「マリヤよ。余は近來著しき人望を博しつつあり。余の運命は是までなり。多くの人望を得る人は何事も成す能はず」と。

獨立自己の意見を斷して實行せざるものは怯懦なり怠惰なり愚鈍なり。

公明正大の事にして直心に決斷す所あらは渾身の勇氣を揮つて進擊せよ。

執着力。ダイオセニスはアンテスゼニスの敎を受んとして其門を叩き先づ拒まる彼頑として動せず。是に於て杖を揮つて骨を折る計りに打たんとす。時に曰く「師よ到底余の執着力を破る程の堅き杖無しと。」ついに弟子とす。

剛毅。剛毅と柔和は兩立し難とは事實は之に反す。溫順柔和は能く男子の特性を作ること女子よりも多きを知るべし。マウトラムは勇敢而も溫厚、婦人を尊敬し幼者に懇切弱者に同情す。ナピールは獸せる動物を殺すに忍びすとして狩獵を廢止せり。

エドワード親王がボイクテールの戰爭に勝ち佛王及王子を捕としたる折、親王は父子

の爲に晩餐會を開き周旋に力めたること從者の如しと。勇敢なる親王の懇切なる態度佛王の子の心を動したり。

チャールス五世ルーエルの墓に詣でゞ碑文を讀む。一從卒、彼の墓を開きて異端者の枯骨を飛散せんことを勸む。王沸然として「朕は死者と爭ふことを欲せず。此地は尊敬すべき靈地なり」と

恐怖を制せよ。恐怖は事實なきに恐怖すること多し一生通じて失ふ所多からむ。

温順敦厚の資性は勇氣の者に之を見る。

精力集中法

斷乎たる意思。一握の綿火藥之を空中に爆發すれが何の威力なし。若し之を特別の裝致を加ふる時は巖をも碎く可し。城をも毀つべし。一滴の水風の弄ぶに任す。一定の方向と不斷の勢力とを與ふれば石を穿つ。意志また然り。志す所透徹せずんば己ざる執着心と勇氣と意志は萬物を開拓す。無智敎育を問はず、只奮ふべからざゞ決心斷乎たる天地を開く。

不屈の精神

アーノルド曰く「一物の上に自己の能力を傾注し之を完成せんと欲せば時々刻々怠らず此主義を實行し以て歲月の久しきに及ぶべし。然る時は習慣性を成して事業はいかに煩瑣なるも困難に耐へ誘惑に打勝つて自己の能力を發揮すべきなり。是克己心なり。

ハックスレー曰く「思ふに訓練の最も重要なる點は、自己の爲さざるべからざる事物に對しては、之を好むと好をざるとを問はず、隨所に着手して成せしむる能力を養成するにあり。之れは人生の第一に學ぶべき課業にして而も一生を通して學ばざるべからざる課業なり。」

一時に一事をなすべし。ピーチ曰く世人は一事に就て三倍の手數を要す。一。豫想。二、着手。三回想す。余は一時に費し、直に着手し實行し成さんとする事に全力を擧

けて完成し次にまた着手するなり。

精力集中の利益

潴水漏るれば水車を動す力を減す。吾人の思慮は事業を成すの泉源なれは、益蓄積を豐にして一事に傾注すべし。彼を思ひ是を煩ひ止もなき不安の念と羨望の心を生して徒に精力を消耗し徒らに成すべき機會を逸するに至る誠に人生の恨事なりと。飽くまで無益の煩累をさけ無用の勞力を省き全力を一事に傾注するの習慣を養生すべし。

無用の勞力は不幸なり。勢力は集中して力あり活氣あり。

一定の目的に努力せよ。

余若し假りに年齡二十歲にして今後十年間生存するものとせば、余は始めの九年間智識を集め十年目に事業に用ん是潛勢力を養ふ。

進まざれば退き、大ならざれば小となり、伸びずんば屈す。停止は終止の初にて死に立つ一歩。

人物に三あり。一は必ず爲さんとす。二は爲すを欲せず。三は爲す能はずとす。一は尊敬すべく、二は天下無用のもの、三は泣き蟲枯木死灰。

グラドストンは一度着手したる事物輕重大小に拘はず幼時より終を全ふする習慣を習へり

決勝點に猛進せよ。フェルプス曰く、兵法必勝策は他なし、機會を見出んとする不斷の注意機會に乘するのオ幹と確心なりと。

「鐵は其赤熱せる時に之を打つべし」いかなる樂あるも障あるも此機を逸するなかれ。

大慈悲に在ます如來よ。今日此の會に集へる我同胞は渴きて泉を求むる如くに如來の聖き寵を仰ぐ。我は自ら信ずる所に於て我同胞に聖旨より出づる眞理を宣へ傳ふ。願くは如來よ我は心闇き愚なるものなれば如來の聖意に違はざるやう加被力を垂れて護らせ玉へ。

如來よ此所に集へる我同胞は飢て糧を求むる如くに眞理の食を望む。我は心愚に智慧なく聖敎を信じてすべての同胞に說明す。願くば如來の聖意に應ふやう憐をこめて靈力を垂れ玉へ。

信の祈

我等が慈父よ自身は現に是罪惡の凡夫曠劫より己來常に沒し常に流轉して出離の緣なきものなりと信ず。又決定して深く信ず。如來は此罪惡深重なる我が爲に無盡の大悲誓願を以て我を攝して必ず救濟し玉ふことを。願くは如來よ我信心增長せんことを。

食作法

我等が大ミオヤよ今此の食はあなたの御力を被りて吾が同胞等か耕し植ゑ耘りなどの百品の苦勞より成して我等に施すものなれば我等はあなたより與へられつつある法喜禪悅の靈の糧をわかちて彼等に報いんと欲す願くば大ミオヤよ御惠みを彼等にわかち得るやう御力を與へ給へ

默念

大ミオヤよ我等は日々の糧を受けざれば活ること能はざると共にあなたの恩寵の靈の糧によらざれば法身慧命は紹ぐこと能はざるものなり　されば此食を爲さんとするに先だちて智慧と慈悲との聖き名を念じて靈のいや增さんことを祈り奉る

大乘同聲に

聖き名を稱へて聖寵を念ずべし

徐々に十稱

あなたに與へられし靈の糧をば我等が信念によりて消化し靈き命の力となして世の爲め人の爲めあなたの光榮を顯すべき働きを爲し得るやう恩寵を垂れ給へ

聖き名を十稱す

大正十三年一月五日印刷同年同月十日發行
誌代年七冊壹圓貳拾錢　年十二冊貳圓
編輯兼發行人　山崎辨成
東京市小石川區茗荷谷町三十七番地
印刷人　土屋六郎
東京市小石川區水道端二丁目四十四番地
發行所　ミオヤのひかり社
振替東京四九三四八番